

# 首都東京における 江戸東京歴史文化まちづくりに向けて

2020年(令和2年) 4月26日  
理事長 小竹直隆



日頃より当会の活動に対し多大なご支援を賜り、篤く御礼を申し上げます。

世界はいま、新型コロナウイルスの感染対応に追われています。古来より、人々は“病いは神の怒りを表す”手段であり、その審判は、社会に、家族に、そして、個人に対するメッセージであると云われてきました。人間の環境破壊は神の怒りに触れたのかもしれませんが。これらコロナがもたらす私達の未来の意識や行動は、個人や社会、世界に大きな変化をもたらすことになるのではないのでしょうか。

今回の基礎調査により、先人達により守られてきた歴史文化遺産を対象に、旧江戸城及び城下町の現千代田区を始めとする8区域の広範囲に及ぶ建造物、史跡等の600ヶ所を踏まえて、歴史文化のゾーニングを7つとして試みたものです。江戸城の5つの城門から放射状に延びる旧街道を中心に、この界限には、旧江戸城の歴史的建造物や遺構、大名庭園など江戸時代の痕跡を数多くみつけることが出来ます。天守や御殿等の失われた歴史文化遺産も数多く眠っています。徳川幕府が築いた江戸城及び城下町の一方でそれらを支えた人々の生活、最強の要塞であった江戸城の石垣に刻まれた印の跡、江戸の季節や景色の美しさ、街の賑わいをどの様な想いで眺めていたのでしょうか。今回は葛飾北斎や歌川広重の名所絵図などから探りました。

東京は多彩な文化に満ちた革新的なダイバーシティであり、世界各国の文化を受け入れ楽しむことも盛んです。歴史文化遺産が再生されることにより、さらに奥深く多様で魅力的な都市になることでしょう。

さて、経済成長を経て成熟期にある日本は、江戸時代以来蓄積されて来た歴史文化遺産を守ること、即ち、いまあるものを活かし、地域全体として再生し着実に未来に繋げるような新しい“まちづくり”戦略や、その組織化された具体的な実施手法を学び、発展させていかなければならないと存じます。

2019年、東京文化資源会議(伊藤滋会長)は、=首都東京の歴史文化ゾーンである=「東京文化資源区」の保全・活用に向けた要望書を、国、東京都、千代田区など関係区に提出されました。

当会は、このご説明を受けて皆様に対する敬意を表し、ご趣旨に賛同して参りました。

東京文化資源会議は、2014年に設立されて以来、東京都内の歴史文化資源の保全・活用と文化的基礎に基づいた都市東京の持続的な発展を目標に、活動を続けて来られました。

しかし、都市部の地価高騰、開発促進の影響により、歴史的建造物や緑地、特に屋敷や旅館、商業地区にある近代建築、古くからの商店街など主に相続時の機会に売却、解体される事例が増えております。

こうした状況を踏まえて、研究会では持続可能な開発に資する法制度・事業についての検討を重ね、その成果に基づいて2019年に国、東京都、関係区に要望書として提出されたものです。

新型コロナウイルスの感染拡大が世界を覆い危機にさらされた現代社会は、たとえこの感染症が終結してもこれまでの状態に簡単に復帰はできない、あるいは社会経済の構造が変容していくとする見方が多くの識者から出されています。この現実を確かなものとして受け止め、私達は、壮大なビジョンを思い描き、先人達や歴史文化まちづくりの先例に学び、「天の時、地の利、人の和」の志をもって首都東京の文化芸術の振興、歴史文化まちづくりに貢献すべく、出来るところから、着実に、間断なく、歩一歩、進めて参ります。

今後共 ご支援、ご指導を賜りますよう、どうぞよろしく願い申し上げます。